警鐘レポート7　小児の急性腹症に関連した死亡
事例2
＜事例概要＞ ・学童期の患児。間欠的な腹痛と複数回の嘔吐あり、近医を受診。腹痛が改善しないため、日中に外来受診。 ・強い腹痛があり、顔色不良。X線で便貯留、超音波検査で下腹部の腸管拡張、腹水を認めた。浣腸を実施し、少量排便あり。腹痛が強く、鎮痙剤を投与。急性胃腸炎と診断し入院。絶食とし、輸液を開始。受診から約12時間後、胃液様の嘔吐あり、身の置き場がない様子が続いた。朝方より腹部膨満を認め、医師へ報告。腹部全体の張りを認めCTを実施。腸管拡張と多量の腹水を認め、緊急手術の方針とするが心停止となり、受診から約24時間後に死亡。 ・死因は、メッケル憩室、絞扼性腸閉塞による腸管壊死。解剖有、死亡時画像診断（Ai）無。